

ショートストーリー 第2話 熱中症編

放課後の校舎は、いつもより静かだった。台風が近づいているせいで、全ての部活が中止になったのだ。今は、校舎裏のベンチでぼんやりと空を見上げていた。むわっとした湿気が肌にまとわりつき、夕方の西日が校舎のコンクリートに反射して、じりじりとした熱を返してくる。

「今日も中止かあ。せっかく試合前で気合い入ってたのにな」

隣でため息をついたのは、同じサッカー部の友人だ。

3か月前の早朝練習で熱中症になったあと、まだ本調子じゃない。

「まだ5月だったしさ、朝なら涼しいと思ったんだけどな……。まさかあの時間で熱中症になるなんてさ」

友人は苦笑しながらカバンから水筒を出す。最近はず本持ち歩いているらしい。

「いや、ほんと驚いたよ。お前って体力あるし、誰より走れるのに」

俺が言うと、友人は肩をすくめた。

「どんなに体力あっても関係ないんだってさ。先生にも言われたけど、寝不足とか体調とかいろいろ絡むと急に来るらしい」

「あー、そういえば言ってたよな。最初はちょっとだるいくらいだったんだろ？」

「そうそう。で、なんか変にめまいしてさ。体の力が抜ける感じであれ、ほんとにヤバかった」

友人は冗談めかして言ったが、水筒を握る指に少し力が入る。



今の東北は、昔よりずっと暑いという。
ぶっちゃけ夏の東北が涼しいなんて想像もできないけど、昔の東北はずっと涼しかったらしい。4月に新入生が入学してくるとあつという間に夏が来て、すぐ外の活動が制限される。

熱中症は重症化すると命に関わる大事だって。熱中症になる人も死ぬ人も前よりずっと増えてるって。前に授業で聞いた話をふと思い出したとき、友人が倒れた時のシーンが蘇って俺は胸の奥が少しざわついた。

「でもさ、校庭使えないのはやっぱり不満だよな」

あの時の怖さで心がヒヤリとしている俺の気も知らず、友人はふと漏らす。

俺は空を見上げた。

西日が赤く滲み、空の端では黒い雲がゆっくりと広がり始めている。風も少し強くなってきた。

「体育館も取り合いだしな。エアコンあるのはありがたいけど、どの部も使いたがるから全然練習できないし」

友人が言うと、俺は苦笑した。

「夏場は校庭ほぼ使えないもんな。昔は普通にやってたらしいけど……今じゃ熱中症警戒アラート出まくりで即中止だし」

二人でそんな話をしていると、校舎の影から人影が近づいてきた。担任の先生だ。俺たちの部活にもよく顔を出してくれる。

「お前たち、まだ帰ってなかったのか」

先生は少し呆れたように笑ったが、その目には心配が浮かぶ。

「台風が来てる。今日は早く帰れ。電車も止まるかもしれないしな」
先生の声は穏やかだが、どこか切迫感があった。

空を見上げると、黒い雲がさらに広がり、風が校舎の窓をガタガタと鳴らしていく。



「先生さよならー！」

明るい声が響いた。

自転車で校門へ向かう女子生徒が、先生に手を挙げている。サドルの下で、鍵についた小さなぬいぐるみが、風に揺れてぶらぶらと手を振るように揺れていた。

その光景を見て、俺はふっと思った。

……あ、帰らなきゃ

「先生、俺たちも帰ります」

「そうだ、気をつけて早く帰れよ」

先生が笑う。

「じゃ、行くか」

「うん」



俺と友人は並んで歩き出した。

少し強い風が頬にあたる。どこか湿った匂いが顔を包む。

空の向こうから台風の気配が静かに、確実に迫ってきているのを感じた。

徐々に空の暗さが広がっていく。さっきまでの放課後の夕日の光はどんどん駆逐されていく。

ふと思う。もし今夜、停電になって、この暑さの中でエアコンが使えなくなったら……

暗闇と同じように暑さからも逃げ場はない。